

平成 29 年 5 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370825

研究課題名(和文) オスマン朝アジア境域のフロンティア社会 アナトリア南東部の地域史の解明を目指して

研究課題名(英文) Society of the Ottoman Borderlands in Asia: For the Clarification of the History of Southeastern Anatolia

研究代表者

齋藤 久美子 (Saito, Kumiko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：90432046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はアナトリア南東部のヒザン地方の歴史を明らかにすることであった。独自の社会や文化が形成されたにも関わらず、様々な要因から同地方の近世から近代にかけての歴史はほぼ空白であった。15世紀以降ヒザン地方ではクルド系部族連合を率いたクルド系諸侯(アミール)の一族が世襲的支配を確立した。16世紀オスマン朝は同地方の政治・社会状況を詳細に把握した上で統治を始めた。しかし17世紀以降ヒザン地方の動向は史料に詳細に記録されなくなるが、それはオスマン朝とサファヴィー朝の国境が確定し同地方の重要性が減少したことが原因だと考えられる。最終的に19世紀前半の近代化の過程でアミール一族は排除された。

研究成果の概要(英文)：The Hizan region in Southeastern Anatolia traditionally forms a unique society and culture, yet a large part of its history from the 16th century to the 19th century remains unknown. This study aimed to elucidate the history of the Hizan region. In the Hizan region, the family of Kurdish Amirs who led the Kurdish tribal confederation established a hereditary control since the 15th century. In the 16th century, the Ottoman Empire began to rule the region based on understanding of the political and social conditions in the Hizan region in detail. However, recording on the Hizan region becomes sparse in the archival documents after the 17th century. The reason for this may be because the military and economic importance of the Hizan region has declined due to the determination of the borders of the Ottomans and the Safavids. Finally the family of Kurdish Amirs was excluded in the process of modernization of the Ottoman Empire.

研究分野：人文学

キーワード：オスマン朝 アナトリア南東部

1. 研究開始当初の背景

(1) トルコ共和国の南東、シリア・イラク・イランと国境を接するアナトリア南東部は、古来よりアジアとヨーロッパを結ぶ交通の要衝であったため、歴史上多くの国が覇権を競った地域である。16世紀初頭にオスマン朝がイランのサファヴィー朝を撃破すると、以後400年にわたりアナトリア南東部はオスマン領内にとどまり、現在はトルコ共和国の一部を成している。またこの地域は東方正教会やアルメニア教会といったキリスト教諸派を始め、ユダヤ教、イスラーム、イスラームの異端とされるヤズィード派など複数の宗教・宗派が共存した歴史を持つ。

(2) アナトリア南東部のなかでも、ヴァン湖の南、現在のビトリス県ヒザン郡(以下、ヒザン地方)は3000メートル級の山々が連なる山岳地帯にあり、積雪量の多い冬期は数ヶ月にわたって道路が閉鎖され周囲から隔絶される。この地域では、15世紀以降クルド系部族連合を率いたクルド系諸侯(アミール)が世襲的支配を確立し、それと同時に周辺王朝に従属することで、部族を中心とした社会を維持した。16世紀にアナトリア南東部がオスマン朝の支配下に入ってからこうした状況が続いたが、17世紀からトルコ共和国が成立した1920年代までこの地域の歴史は空白に近い。

(3) 20世紀以降のヒザン地方の歴史は反乱や部族社会の負の遺産「血の復讐」によって語られることが多い。政府による圧迫や処罰が行われ、部族の解体のために強制移住がすすめられた。1980年代にはトルコからの分離独立を目的としたクルド系武装組織による武装闘争が始まり、ヒザン地方の多くの住民も自主的・強制的に家を追われた。2000年代に入り、武装闘争が終息すると、治安状況は徐々に改善し、政府主導の帰村運動がすすめられた。

(4) オスマン朝末期の19世紀末から20世紀初頭にかけて、アナトリア南東部のキリスト教徒やユダヤ教徒がさまざまな理由によって姿を消し、同地域はイスラーム教徒のクルド人が多数派を占める土地に変わった。そしてトルコにおける「クルド問題」の発生は歴史研究にも影を及ぼし、アナトリア南東部の研究は長い間進展を見なかったという背景がある。

2. 研究の目的

(1) 2000年代に入り、トルコ政府のクルド政策の転換と研究および調査環境の改善により、アナトリア南東部の歴史の重要性が再認識されるようになった。翻ってヒザン地方の歴史には長期にわたる空白期間があるが、これはアナトリア南東部でもほかに例をみない。そこで、本研究では、近世から近代に

かけてのヒザン地方の歴史を解明することを目的とした。

(2) 2000年代以降アナトリア南東部では大学の新設ラッシュが続き、地元出身の研究者も大幅に増加した。トルコ政府のクルド政策の見直しや治安状況の改善も伴い、地域の歴史や文化が再発見され、モスクや教会といった歴史建造物の保存や修復作業もすすめられた。しかしながらヒザン地方に限っては、長期にわたる混乱のなかで歴史建造物が朽ち果てるままになっている。そこで比較的史跡の保存や修復が進んでいるほかの地域に先駆けて、まずヒザン地方に残る歴史建造物を調べることにした。

3. 研究の方法

本研究では近世から近代までのヒザン地方の歴史を解明するために、おもに以下の2つの方法で調査を行った。

(1) 研究機関での史料調査

主たる調査地はトルコのイスタンブールにある首相府オスマン文書館であるが、ほかにもブルガリアやギリシアといったバルカン各国の研究機関でオスマン文書を調査し、オスマン朝の地方支配およびヒザン統治の状況について考察した。ヒザン地方の歴史における一番の謎は、ヒザン地方の支配者であり、当地のクルド系部族連合を統率したヒザン・アミール(クルド系諸侯)がいつオスマン政府によって排除されたかである。現在ヒザン地方にはヒザン・アミール(クルド系諸侯)の末裔はいなく、ヒザン・アミールについて知る者もないことから、いずれかの段階で排除されたと考えられる。この点にたくに留意して史料調査をすすめた。

(2) ヒザン地方での現地調査

原則として、オスマン文書から分かることは中央と地方の関係、もしくは中央から見た地方の動向である。そこでオスマン文書には記されることのない中央の地方統治に対する地方の認識や、地方の権力構造、部族を中心とした社会の解明のために、ヒザン地方での調査を実施した。調査は以下の2点に絞った。(1)史跡を視察し、歴史建造物の由来を確認する。(2)クルド系諸部族の有力者の末裔に聞き取りをする。加えてインフォーマントが系図や寄進文書などを所有する場合は、それらを確認する。

(1) ヒザン地方の歴史建造物については本格的な調査が行われておらず、国外どころか国内でも周知されていない状況にあった。そこでヒザン市を拠点として、ほぼ未舗装の道路/山道に沿って一つ一つ歴史建造物(城塞、モスク、マドラサ、隊商宿、橋、墓廟、教会、修道院)を確認していった。その際GPSレシーバーにより位置を確認・保存するとともに、

碑文が残されている場合はその記録を取った。

(2) 歴史的にヒザン地方の支配層を形成したクルド系諸部族の有力者の末裔は、現在でも地域の有力者として活躍している場合が多い。インタビューではクルド系諸部族の有力者の系図や寄進文書などについて聞き取りを行った。現在に伝わるオスマン朝期のものとされる墓廟と墓碑についても同様に聞き取りを行った。またヒザン地方では歴史的に多くの部族が活動したことが分かっているが、そうした部族についても聞き取りを行い、部族名、ほかの部族との関係性、村と部族のつながり(どの村がどの部族に属していたか)、各部族地域の境界について情報を得た。さらに近代まで当地の人口の多数を占めたと推測されるキリスト教徒についても、過去に存在した村の名前や位置、村の歴史について聞き取りを行った。

4. 研究成果

本研究は歴史研究に現地での視察を取り入れて進められた。結果として歴史研究だけでは不明だったいくつかの点を明らかにすることができた。以下、具体的に本研究の成果を挙げる。

(1) ヒザン地方の歴史の最大の謎が同地方を世襲的に支配したヒザン・アミール(クルド系諸侯)の一族がいつオスマン政府によって排除されたかであった。オスマン文書の調査から1830年代から40年代であったことが分かった。19世紀前半、集権化をすすめたオスマン政府は地方有力者を排除していったが、この過程でヒザン・アミール一族も対象となったと考えられた。

(2) 各史料から、ヒザン・アミール(クルド系諸侯)の統率下にあった諸部族が土地を保有したことが確認できるが、各部族が保有する土地の境界は不明であった。そこで、現地で聞き取りを行い、史料にあらわれる村や夏営地の名前と場所を確認するとともに、川や山など自然が境となっていたことを確認した。

(3) (2)と関連して、廃墟となった城塞や崩れ落ちた橋といった境界地域に多い歴史建造物も確認した。上記(2)やほかの史料での記述もあわせて考えると、境界となったのが川であることが多く、川にかかる橋では通行税が徴収され、さらに往来の者たちを監視し税を徴収するために、橋のすぐそばに城塞が建設(もしくは以前からあるものを修復して使用)されたことが理解できた。往来の者から徴収する税がクルド系諸部族の経済基盤となっていたことは明白であり、それが原因となって境界をめぐる部族間抗争が発生していたと考えられる。

(4) 本研究からオスマン政府がどの程度辺境地域の政治・社会情勢を把握していたのかも明らかになりつつある。オスマン朝の地方統治の方法として、征服地の旧支配層をそのまま温存したことが知られている。例えば、征服地の旧支配者を県知事として任命したケースがある。ヒザン地方も例外ではなく、16世紀前半、オスマン朝支配下に入った同地方ではヒザン県が設立され、県知事として任命されたのはヒザン・アミール(クルド系諸侯)であった。その後ヒザン県から分離してナミーランとメルヴァナンという二つの県が新たに設立された。ナミーランとメルヴァナンとは、元々ヒザン・アミール(クルド系諸侯)に属した部族であり、県知事となったのは二つの部族長であった。16世紀後半の一時期、この二つの部族はヒザン・アミール(クルド系諸侯)から独立していたことになる。オスマン政府がイスタンブールから1500キロメートル以上離れた辺境の山岳地域の政治状況を正確に把握しただけではなく、小さな部族勢力に権力を与えることで大きな部族勢力を牽制するという地域のパワーバランスを考慮した政策を遂行していたことが理解できた。

(5) 16世紀オスマン政府がヒザン地方の政治・社会状況を正確に把握したのは、単に政策としてだけでなく、イランのサファヴィー朝の影響も考慮する必要がある。アナトリア南東部が完全にオスマン支配下に入ったのは16世紀半ばであり、それ以降も16世紀末までサファヴィー朝による略奪行為が続いた。イランとアナトリアを結ぶ交易ルートは南と北で二本あるが、南のルートはヴァン湖北方の平地を通るものだった。ところが16世紀末までヴァン湖北方はサファヴィー朝の略奪隊の出現に悩まされた。おそらくそのためにヴァン湖南方のヒザン地方を通る山岳ルートが推奨された。事実、当時のヴァン州総督がヴァン湖南方の山岳ルート沿いに橋や隊商宿を建設したことが現在でも地元住民に伝わっていて、実際に橋や隊商宿の廃墟が残っている。オスマン朝とサファヴィー朝の抗争が両国の境界地域に位置したヒザン地方にも影響を与え、交易ルートの変更によりヒザン地方の政治的・経済的重要性が増したと考えられる。

(6) 17世紀、オスマン朝の地方統治のあり方は大きく変容したと考えられている。アナトリア南東部に限って言えば、中央での政治的混乱や財政的理由により、(5)に記した16世紀のような面的支配から、17世紀には拠点支配へと変わったと考えられる。つまりアナトリア南東部全域の政治・社会状況を詳細に把握し、それに沿ったかたちで統治するのではなく、重要拠点を重点的に支配する方法へと変わったと考えられる。それを裏付けるか

のように、17世紀から18世紀にかけて重要拠点とされた(クルド系諸侯が管理する)県と重要拠点ではないとされた(クルド系諸侯が管理する)県で、史料に記載される情報量に大きな差が出てくる。ヒザン地方の動向も17世紀から18世紀にかけて詳細に記されることがなくなる。これはおそらく中央政府から見てヒザン地方の重要性が減少したことを意味すると思われるが、その理由としては、イランのサファヴィー朝との国境が確定し、アナトリアにおけるサファヴィー朝の影響力が減少したこと、これに伴いイランとアナトリアを結ぶ交易ルートのうち、ヴァン湖北岸の平地を通るルートの安全が確保され、ヴァン湖南岸のヒザン地方を含む山岳地域を通るルートの利用が減少したことが考えられるだろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

齋藤久美子、南東アナトリア交易路の表と裏 オスマン政府による統制とその限界、「近世以降期の港市と内陸後背地の関係に見る自然・世界・社会観の変容」研究会、立教大学池袋キャンパス、2016年1月9日

齋藤久美子、動くサンジャク(県) 16-17世紀アナトリア南東部の移動する人間集団を対象とした地方行政組織、AA研共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」研究会、東京外国語大学本郷サテライト、2016年11月19日
齋藤久美子、批評と紹介 Markus Dressler, Writing Religion: The Making of Turkish Alevi Islam, New York: Oxford Univ. Press, 2013、アレヴィーノペクタシー研究会、大阪国際大学、2017年3月26日

〔図書〕(計1件)

佐島隆、齋藤久美子(編) 大阪国際大学、聖所と参詣行動、2014

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

齋藤久美子、オスマン朝のクズルバシュ対策、近藤信彰(編) 近世イスラーム国家史研究の現在、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2015、pp. 107-120

齋藤久美子、映画から知る現代社会『消えた声が、その名を呼ぶ』とトルコ南東部の今 アルメニア人の残した風景、ワセダアジアレビュー、vol. 19号、2016、pp. 66-69

山口昭彦、齋藤久美子、武田歩、能勢美紀(共訳)、マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(1)、聖心女子大学論叢、vol. 127、2016、pp. 89-116

山口昭彦、齋藤久美子、武田歩、能勢美紀(共訳)、マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(2)、聖心女子大学論叢、vol. 128、2017、pp. 155-217

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤久美子 (SAITO, Kumiko)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：90432046

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()